

清河八郎顕彰会だより

<令和7年5月発行第16号>

顕彰会だより第16号に寄せて

清河八郎顕彰会会長 齋藤 満



会員の皆様におかれましてはお変わりなく、ご清栄のこととお慶び申し上げます。また、顕彰会活動には日頃からご指導・ご支援を賜り心から感謝申し上げます。昨年は度重なる記録的な豪雨により、全国各地で甚大な被害を受けました。被災を受けられた皆様には心からお見舞いと早い復興をお祈り申し上げます。

山形県も大雨で土砂崩れが発生しました。当顕彰会事業である「歩いて楽しむ回廊の道と清川歴史の旅」も山道が崩壊し残念ながら中止いたしました。

そのような中、令和6年度は佐高信先生の講演会を開催、更には庄内町教育委員会主催で関係機関挙げてのシンポジウムを盛大に開くことができました。

顕彰活動を遡ってみると昭和37(1962)年に、清河八郎没後 100 年忌にあたり、「清河八郎百年祭奉賛会」を組織し顕彰運動を展開し、地方の有志や東京山形県人会の皆さんのご協力で記念式典を盛大に行ったと記録されています。同年に清河八郎記念館を建設、更には、「清河八郎文化賞」制度が創設され、10ヵ年にわたり教育文化・産業などへの貢献者を顕彰されました。

現在の顕彰会は、平成 22(2010)年に清河八郎公生誕 180 年にあたるのを契機に平成 21(2009)年に発足し、清河八郎公生誕180年記念シンポジウムを東京で開催し、以来毎年著名な有識者の先生をお招きして後援会・シンポジウム等を開き、広報活動を行っております。

末筆ながら、平成 30(2018)年に発足した「清河八郎大河ドラマ化誘致協議会」他関係機関と連携を密にし、清河八郎公を全国に発信してまいりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

堂々とした剣道が凄いと思った 第 91 回清河八郎顕彰剣道演武大会



第91回清河八郎顕彰剣道演武大会参加者

令和6年7月6日(土)、清川体育館(旧清川小、中学校体育館)で、「第91回清河八郎顕彰剣道演武大会」が、立川剣友会が運営母体となり、田川地区剣道連盟の全面的な支援を受け開催しました。

参加して頂いたのは立川中学校剣道部員2名を含む、28名の演武者で、参加された皆さんはいずれも全日本剣道連盟教士や錬士の称号を持つ庄内地方剣道の中心的指導者の方々です。参加した中学生は、「たくさんの先生

生方が見ている中での試合は、すごく緊張しました。先生方の試合は気迫があり、堂々とした剣道が凄いと思いました。」と話してくれました。この事業を開催するにあたり土曜会、有隣館、鶴岡振武会、余目剣友会、藤島剣友会、羽黒剣友会、朝日剣友会、櫛引剣友会、三川致道会、酒田地区剣道連盟の皆様からご理解とご支援を頂き厚く感謝申し上げます。

清河八郎の真実に迫る

——清河八郎と明治維新——



ステージ全景

- 主催: 清河八郎顕彰会
- 主管: 「清河八郎の真実に迫る」講演会実行委員会
- 共催: 清川地区振興協議会、(公財)清河八郎記念館、庄内町「清河八郎」大河ドラマ誘致協議会
- 後援: 庄内町教育委員会、庄内町観光協会、庄内町郷土史研究会、清河八郎研究会、飽海地域史研究会

令和6年7月15日(月・海の日)に、庄内町文化創造館「響ホール」で、酒田市出身評論家佐高信氏を講師に講演会を開催しました。

事前の申し込み人数は283人、当日会場の受付窓口で記帳頂いた方が45人、合計で328人になっています。それに来賓の皆さん、スタッフの皆さん、合わせて約350人の方々から聴講頂きました。



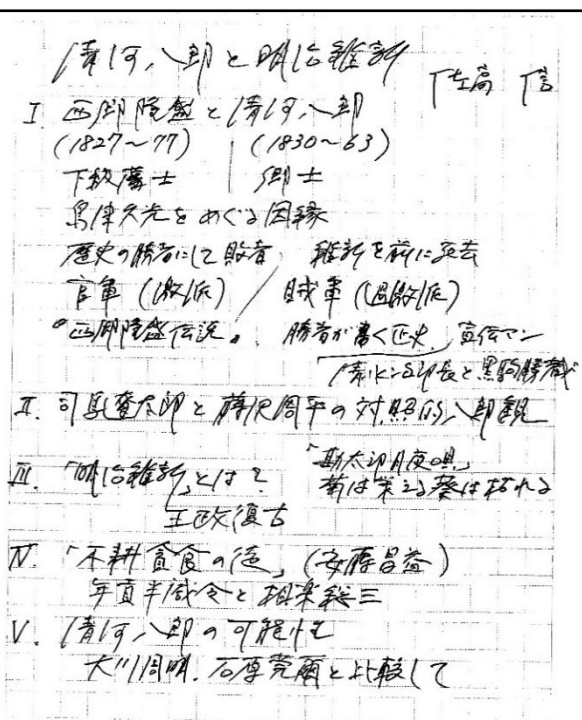
講演する佐高信氏

講演概要——故郷は辛い土地——

「今日は庄内農高の教え子も来ているということだが、率直に言って故郷で喋ると言うのは容易でないものがある。(会場:パラパラと拍手)……今の拍手はどういう意味かよく分からないですが、(会場:あちこちで笑い)……藤沢周平さんが故郷は辛い土地でもあると言っている。それは、若さに紛れて人を傷つけた記憶が蘇るからだ。故郷は辛い土地、自分も80歳を目前にしてちょっとそんな感じを強くしている。」

講演冒頭、この様に故郷で語ることの心情を吐露し、佐高信の世界に聴講者を惹き込んでくれました。

▼佐高信氏直筆の講演会レジュメ



I 西郷隆盛と清河八郎

西郷隆盛は明治維新を起こした薩長、薩摩の出身で、清河八郎は、賊軍とされた庄内藩の出身。歴史が正しいか、正史と言うものは大体勝者が書く。薩摩、長州と言うものが明治維新を成し遂げたということになるので、賊軍と言う側の歴史は消されていく。

II 司馬遼太郎と藤沢周平の対照的八郎観

司馬遼太郎は、薩長史観にたっており、倒幕を起こすと言いながら、天皇の名を利用して動き回った男として「奇妙なり八郎」と言う短編を書いた。

その山師と言う表現に憤激して藤沢さんは「回天の門」と言う長編を書いたと後書きで言っている。

八郎の盟友山岡鐵太郎(山岡鉄舟)が清河八郎についてこう書いている。「彼は、百年に一人の英雄だと、ただ惜しいことに背景を持たぬ。我々には大公儀と言う背景がある。薩摩、長州の志士たちも藩の背景がある。そこへ行く



開演前に「維新の魁清河八郎」DVD 上映

と、あの男はたった一人だ。一人で天下の大事を成さんとすれば、あちらを騙し、こちらを騙し、とにかく芸が細くなる。今少しあの男が英雄らしくなるまで生かしておいたらどうだろう。」

その背景を持たないと言うことがどういう事なのか、背景に拘った司馬遼太郎には見えなかった。

Ⅲ明治維新とは？

明治維新と言うのは王政復古で、つまり、天皇の世に戻すということなんだから、明治維新と言うものが本当の意味での改革だったのか、清河八郎と言う人物は何を望んでいたのか、此处が一番大事な点だと思う。

Ⅳ不耕食食の徒(ふこうどんじきのと)年貢半減令と相楽総三

秋田出身で幕末の思想家、安藤昌益が「不耕食食の徒」と言う言葉を残している。「不耕食食の徒」と言うのは、「耕さず、食う食う輩」と言うことで、百姓、当時八割を占めていた百姓、農民から見て、武士、あるいは公家のことを言っている。

戊辰戦争は、薩摩、長州のいわゆる官軍と、それに対抗したのが奥羽越列藩同盟で勢力は拮抗していた。当時八割を占めていた百姓をどちらの味方につけるのか、と言うことが当時非常に大きな問題だった。

相楽総三は、赤報隊を組織し新政府になったら年貢が半分になると信じて触れ回り、味方になる百姓達を増やしていった。しかし、新政府はしだいに年貢を半分にしたらやって行けないことが分かり、あいつらは偽官軍だと言って、相楽総三を捕まえて断罪した。

私は清河八郎もこの相楽総三と同じ運命をたどったのではないかと思っている。つまり、清河八郎の中にはやっぱり百姓、農民への思いと言うものは武士以上に強いものがありながら、維新と言うものが、本当に百姓の為のものなのかどうかと悩む前に亡くなってしまった。

Ⅴ清河八郎の可能性、大川周明、石原莞爾と比較して

藤沢周平さんがエッセイ集「周平独言」の中で三人の予見者として、石原莞爾、大川周明、そして清河八郎を書いている。

三人ともある種正道と言うか、広い道と言うか、そう言うものは歩きたくないと言うか、そういうものでなくて、ある種険しい道を選んで歩きたくなると言うようなものが、石原莞爾、大川周明、清河八郎の三人の中に流れている。

それは、やっぱり、ある種庄内の風土と言うものとも関係しているのかも知れない。

清河八郎は、三十三歳で亡くなったということは勿論悲劇だが、清河八郎の目指したものの背景に何があったのか、明治維新と言うものの中でどう位置付けるか、それは端的に言って、百姓、当時大多数を占めていた百姓にとっての世の中だったのかと言うことと、無縁に語られるものではないし、語られてはならないのではないかなと思う。



会場は聴講者でいっぱいでした。

※ 終了後のアンケートに寄せられたご意見を紹介します。

佐高先生のお話は、簡潔でとても興味深かった。もし清河八郎氏のドラマ等がつくられた時は、先生の語る通り藤沢先生のような人の温度のある作品であることを祈る。特に最近の若い世代は、「The 英雄の素晴らしい人生」より、「努力する等身代の人間」に対して共感することに重きを置いて作品を選ぶ傾向があるようなので、今がチャンスだと強く信じます。貴重な機会をありがとうございました。

幕末三舟の一人、高橋泥舟と庄内・清川

■主催:庄内町、庄内町教育委員会 ■共催:清河八郎顕彰会、東洋大学講師派遣事業、(公財)清河八郎記念館、庄内町「清河八郎」大河ドラマ誘致協議会、清川地区振興協議会 ■後援:庄内町観光協会、清河八郎研究会、庄内町郷土史研究会



開会式風景

令和6年9月16日(月・敬老の日)、庄内町文化創造館「響ホール」で、東洋大学文学部教授岩下哲典氏と、フリー翻訳家イアン・アーシー氏を講師に招き、庄内町史資料第七号の発刊を記念してのシンポジウムが開催されました。資料集は、明治22年に、高橋泥舟が山形を訪れ、清河八郎の墓参りを行ったことなどが記されている日記文を翻刻し、さらに読み下し文を加え、A4判、198ページの装丁になっています。

この第七号には明治大学名誉教授徳田武氏が解説した、清河八郎の長崎紀行日誌「西遊記事」も収められています。

■第一部 基調講演概要



岩下哲典氏

演題
『泥舟とは
どんな人物か』
東洋大学
文学部教授
【岩下哲典氏】

高橋泥舟は、将軍慶喜からの信頼が厚く、西郷との会談に鉄舟を推薦したのは泥舟ですから、江戸無血開城のナンバーワンだと思います。ナンバーワンが山岡鉄舟。世間では勝海舟がナンバーワンだと思われるが私はそうは思っていない。

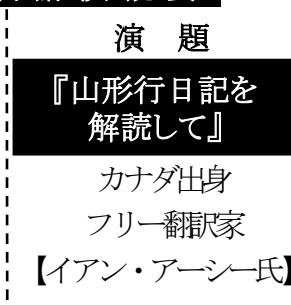
高橋泥舟は、仏教の再興を果たそうとした人物で、山岡鉄舟と共に、禅宗、特に臨済宗の白隠と言う人物の再評価に奔走している。

また多くの慈善事業にも参画し、鉄舟と共に貧しい家庭の子供や孤児の為に福祉施設を造っている。

そして高橋泥舟は何といっても「旅する揮毫家」だった。いろんなところで、軸や扁額を頼まれて書いている。

「山形行日記」を翻刻したのは日本初であり、庄内町の資料集の中に入れて貰ったのは凄く有難い。

この旅は清河八郎の墓参りがメインだったと思うが、いろんな人から熱烈歓迎されていることが伺える。



イアン・アーシー氏

演題
『山形行日記を
解説して』
カナダ出身
フリー翻訳家
【イアン・アーシー氏】

この日記は、今から135年前、明治22年の秋に泥舟が山形県を旅した際に作成した記録で、汽車で東京から宮城県の白石まで行って、それから仙台経由をし、人力車で山形県に入り、谷地から舟で最上川を下り、大石田を通過して清川に来ている。

泥舟さんの難しい原文を一字一字活字起こす翻刻作業を行い、併せて読み易くするため読み下し文を作成した。日記の中には山形行の目的は記していないが、一つは清河八郎の追悼の旅だったと思う。清河八郎とは幕末親しく交流しており、暗殺される当日、清河は泥舟の家を訪ねている。清河の突然の死は大変なショックだったと思う。「清河八郎の墓に詣でて」として、『西へ行く 雲と消えても 天の下に たていさおぞ 世に残りける』と言う和歌を日記に残している。

■第二部 座談会概要

■【登壇者】東洋大学文学部教授岩下哲典氏、フリー翻訳家イアン・アーシー氏、鶴岡市郷土資料館館長補佐今野章氏

■【コーディネーター】前庄内町文化財保護審議会会長・清河八郎生家菩提寺「金華山歆喜寺」住職柳川泰善氏

【柳川泰善氏】:この日記の解説は平成16年、私が八郎さんの墓を掃除していた時に、たまたま河北町の議長さんや泥舟研究会の方が、河北町の町政施行50周年記念として、泥舟展を開催するということで、八郎さんの墓にお参りに来た時に出会ったのが切っ掛けだった。

私の寺にも泥舟さんの書があり、見てはいたのだが何しろ難しい。そうしているうちに、一昨年、「旅する思



柳川泰善氏

想家清河八郎」と言うことで、岩下先生が講演の為にお出でになった時に実は解説をお願いしていた。

今回、お三方が完全に解説し、翻刻し、読み下し文に完成したということは、私は、年来の念願が叶ったと言うことを痛切に感じており、大変有難く思っている。まず最初に御礼申し上げたい。



【今野章氏】：明治22年の庄内の状況は、大日本国憲法が發布され、西郷隆盛の賊名が解かれ「南洲翁遺訓」の編纂を手掛けた年になる。また鶴岡、酒田における町議会議員の最初の選挙もあった。

泥舟さんには特に僧侶の方が多く訪ねている。鶴岡の忠愛学校（日本で最初に給食を始めた学校）の扁額を揮毫し開校式に招待され参列している。

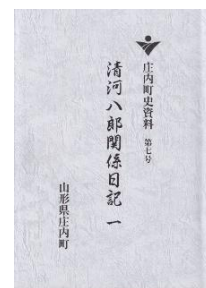
更には庄内士族の方も大勢訪ねて来ている。10月12日には、「黒川来たる」との記載がある。黒川は清河八郎が江戸庄内藩邸に建白書を持参した時に実際取り扱った人物で、それと関連して泥舟を訪ねて来たのではないかと読み取れるし、西田川郡役所の郡長や役人が訪ねて来る記述もある。

【イアン・アーシー氏】：解説を始めた頃はちょうどコロナ禍だったので、三人のオンライン会議で行った。

今日参加していない服部さんは80歳を超えているにも拘らず、もの凄く良く読めるし、頭の切れる方で、この解説の入力作業を担当してくださった。コロナ禍が少し収まってから、服部さんと二人で主に喫茶店で文書の確認を行った。喫茶店では「なんとか候。かんとか候。」の会話が始まって周りの人は驚いたのではないだろうか。

【岩下哲典氏】：幕末三舟の掛け軸は、真ん中に海舟、脇侍として泥舟と鉄舟が飾られているのが普通だが、その中でも梅の古木のごとく雄渾な字体は泥舟さんで、筆使いも力強くて圧倒されるのは鉄舟の字体だ。好き、好きもあるが、泥舟さんの雄渾な字体と鉄舟さんの個性的な字体の間で、個性的でも何でもないので海舟の字体だと思う。

清河八郎大河ドラマ化について、今日の大河や、朝ドラは女性が主人公と言うことになっているので、お蓮さんを中心にしたらと思う。悲劇の女性だが、学識レベルも高く、一途な愛を貫いて現代に一石を投じるドラマになりうと思う。



定価1,400円（消費税込み、送料、振込手数料は別途です。）

- 「庄内町史資料 第七号」
清河八郎関係日記一
- 取り扱い先
- ① 庄内町教育委員会社会教育課
電話：0234(43)0194
 - ② 公益財団法人清河八郎記念館
電話：0234(57)2104
 - ③ 清川歴史公園庄内藩清川関所
電話：0234(25)5885
 - ④ 庄内町立図書館
電話：0234(43)3039

清河神社コーナー

新本殿造営なる

清河神社が創建されたのは今から92年前の昭和8年、神明造り銅板葺きで正四位を賜った郷土の英傑に相応しい社殿ですが、平成26年には、冬期間の落雪に伴う摩擦により銅板が摩耗し、雨水の浸透、漏水によるとみられる垂木等構造材の腐食から、銅板接合部の剥離が発生しております。

その時は応急工事により急場をしのいでおりましたが、近年は内陣の損傷が見られ、抜本的な対策が必要になり、令和5年、6年と神社役員会で度重なる協議を重ねてきました。

その結果、清川地区は創建当時に比べると世帯、人口共に急激な減少が顕著になり、空き地が目立ってきているのが実情です。また、ここ十有余年で拝殿屋根改修、そして鳥居修復と二度も地元の皆さんは勿論、全国の皆さんに経済的負担をお願いしており、三度の負担はお願いすべきではないとの意見が多数を占めたことから、神社自己資金の範囲内で事業化することが最善であるとの結論に達し、新たにささやかな社殿を造営しております。

新本殿は、高さ幅、奥行き共に1.8mで無垢の杉材を用い、階段は檜材になっています。株式会社今井建築が令和6年9月1日に着工し、同年11月19日に完成しております。



新たな神社本殿

令和6年10月24日(木)、公益財団法人清河八郎記念館、令和6年度特別展を企画構成した池田定志氏(元庄内町教育長、現公益財団法人清河八郎記念館理事)によるギャラリートークが開催されました。

約30人の聴講者を前にして、八郎は外国との通商により、庶民の暮らしが困窮を極める中、「経世済民」の理想を掲げ、挙国一致(オールジャパン)の攘夷運動を目指したと解説してくれました。

※以下の文章は、講義の概要として池田氏本人からいただいたものです。[原文ママ]

『八郎の尊皇攘夷は「赤心報国回天倡始」

尊攘急進派として九州遊説をし、志士たちを奮い立たせ、薩摩藩と京都挙兵を試み、明治維新の扉を開いた。

さらに、幕府の尽忠報国の志士募集に積極的に協力し浪士隊を結成した。後の新選組、新徴組となる。京都で尊皇攘夷運動が最高潮に高まる中で、幕府の攘夷活動の実行促すべく計画した。この機を活かし、朝廷のもと国を挙げて国難を乗り越えようとした企画は、時代がまだ熟していなかった。

八郎には薩摩藩であろうが幕府だろうが挙国一致の国造りの道筋になればよかった。外国に侮られないオールジャパンの国づくりを目指したと考えられる。

また、広く身分を超えて有能な人材を登用し、慎重に開国し、富国強兵をめざしたと推測される。心から体制の御一新を願い、命がけで時代を先取りした秀才であった。』



講演する池田定志氏

顕彰会への加入状況

(単位：人／△：減)

年 度	清 川 地区内	清 川 地 区 外							合 計
		県 内			県 外		法人等	計	
		庄内町	庄 内 地 方	庄内地 方以外	東 北	東北 以外			
令和5年度	146	45	21	6	3	27	18	120	266
令和6年度	140	49	18	6	2	27	26	128	268
増 減	△6	4	△3	—	△1	—	8	8	2

顕彰会への継続及び新規加入のお願い

令和6年度における顕彰会への加入状況は、清川地区内においては、会員自体の高齢化あるいは世帯そのものの減少から6人の減になっていますが、法人の方々から心強い支援を賜り8社増加となり、全体の会員数は昨年度より増えております。

会員になられますと、記念館入館無料の年間パスポート、賛助会員以上の皆様には八郎を題材にした小冊子の寄贈等の特典を考えております。

本会の活動は会員皆様の会費で運営されておりますので、清河八郎顕彰事業にご賛同頂き是非ご加入くださいますようお願いいたします。

顕彰会及び記念館に関するお問い合わせは

☎0234-57-2104 (公益財団法人清河八郎記念館・FAX兼用) へお願いします。



記念館メール



清河八郎
顕彰会 HP



清河八郎 HP



清河八郎顕彰会
Blog



八郎辞世の歌
YouTube



歴史の里清川
YouTube



大河ドラマ誘
致協議会 X